

今こそ特措法に基づく救済措置の発動を！

タイラギの水揚げは昨年比9割減

【読売新聞・2012年5月1日】タイラギ漁獲9割減、餌不足や大量死

太良町沖の有明海で昨年12月18日に始まった今季(2011年度)

のタイラギ漁は、30日で漁期が終わった。総水揚げ量(貝柱重量)は、昨季の43・1トンに比べて92%減の3・5トン。豊漁だった2009年度のシーズンの112・6トンと比較すれば、3%という数字だ。極端な不漁のため、漁師らは、すでに今季の漁を打ち切っていたが、来季を心配する声も早くも聞かれる。県有明海漁協大浦支所(太良町)によると、今季のタイラギ漁で操業許可を受けたのは、昨季の68隻より大幅に少ない28隻で、実際に操業したのは14隻にとどまった。出漁する船は4月中旬以降、1けたに減り、実質的な最終日とした同



18日は1隻のみだった。水揚げ量が少なかったため、今季は支所での入札は行われず、そのまま市場に出荷。1キロ当たりの平均価格は、昨季より約1000円高い3400円だった。

県有明水産振興センター(小城市)によると、今季は成長期の夏場に餌となるプランクトンが不足したため、生育不良が多く発生。また、海中の酸素濃度が低くなったことで、大量死も見られたという。

漁業者の間では、諫早湾干拓事業(長崎県)と有明海の環境変化の因果関係を調べるために、早期の開門調査を望む意見は根強い。10年12月の福岡高裁判決で、国は来年12月までに同事業の潮受け堤防排水門を開門する義務を負っている。4月7日、高裁判決以降では初めて

鹿野農相が県内を訪れた。意見交換の場で県内の漁業者は「原因究明には、全面的に開門して調査するしかない」と訴えた。これに対し、鹿野農相は、制限的開門を基本にする意向を示し、開門時期は明言しなかった。

太良町のタイラギ漁師、大鋸幸弘さん(55)は「出漁しても船の燃料代で赤字になる恐れがある」として今季のタイラギ漁を諦め、代わりにカニ漁などで生計を立てた。

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

大鋸さんは「来季こそは出漁したいが、原因究明が遅れるほど、状況は悪くなるばかりだ。開門調査の実施期限は決まっているのだから、国は誠実に対応してほしい」と強調する。

地域格差が顕著に表れている ノリ養殖被害の現状

【朝日新聞・2012年4月12日】ノリ入札、不振の中終了 鹿島は昨季の半分

今季の県内のノリ養殖が、11日の入札会で終わった。9年連続で生産量日本一を記録する見通しになつたが、生産枚数は18億2千万枚で振るわなかった。中でも、栄養不足になりがちな県西部の有明海は、秋の集中豪雨やプランクトンの異常発生で、今季も苦戦を強いられた。

「もう体力な。来季の生産期が来るのが怖い」10日、今季のノリ養殖を終え、支柱の撤去をしていた鹿島市の中村和也さん(37)は力なく笑った。

県有明海漁協によると、この数年、生産枚数は20億枚前後、販売金額は200億円前後を保ってきたが、今季の県内全体のノリの生産枚数は18億2千万枚、販売金額は194億円で、対前季比2割減となつた。

同漁協鹿島市支所は、さらに振るわなかった。同支所によると、今季の生産枚数は約1億4千万枚、販売金額13億円で、いずれも前季の約半分。近年最も不作だった2008年の1億6千万枚も下回り、過去5年間で最悪だった。

もともと、筑後川からの豊富な栄養が供給される有明海東部と違い、西部はノリ養殖が難しいとされる。鹿島市の漁民らは、1995年から山に植林を続け、山からの栄養が増えるように取り組んできた。

だが、鹿島市支所の野田勝さん(44)は「今年はずっと太刀打ちできなかった」と悔しそうに話した。

同支所の青年部は約3年前から年1回、海上にブイを浮かべ、潮流調査を始めた。潮の流れが良くなるようにノリ網の向きや間隔も変えた。海底を耕運機で耕し、底質の環境改善にも力を入れる。

しかし、そうした努力が一向に実らない。「潮流が変化し、泥がたまりやすくなった。諫早湾を閉め切つて以降、海が悪化してきていると感じる」と話す野田さんは、「山の環境の悪化など、様々な原因が考えられる。自分たちでやれることをやっていくしかない」と、来季に向けての決意を込めながら話した。